

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：32663

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884062

研究課題名(和文) 死の隠蔽と苦悩に抗する哲学的実践としての終末期ケア構想 臨床死生学の視点から

研究課題名(英文) A design for terminal care as a philosophical practice against hiding and suffering of death : From a view of clinical thanatology

研究代表者

岩崎 大 (IWASAKI, Dai)

東洋大学・東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ・研究助手

研究者番号：80706565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代社会の傾向としての「死の隠蔽」あるいは「死のタブー視」を背景にして顕在化する終末期医療における諸問題に対し、哲学的実践の方法を提示した。第一に、死生学という学問を基礎付けることにより、人間にとって本質的な死の位相を学際的に明らかにした。第二に、死への苦悩を抱える終末期医療に関わる人々に対して、死の隠蔽や苦悩の解消という枠組みではない、死生観形成のために積極的に思索する「実存的コミュニケーション」の必要性を述べた。

研究成果の概要(英文)：This research offers some philosophical practices in terminal/palliative care that has had problems based on modern tendency toward "hiding death" or "tabooed death". First, the knowledge of Thanatology was founded. This transdisciplinary attempt explained about death topologically. Second, a possibility of "the existential communication" has offered. Terminal ill patients suffered from death not medically but essentially. This communication intends terminally ill patients to think about their own views of life and death aggressively without the framework for hiding death and getting relief from pain

研究分野：哲学、死生学

キーワード：死生学 哲学 終末期医療 緩和ケア 死生観 実存 死の隠蔽 死のタブー視

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 死生学の誕生と意義

死生学(Thanatology)という学問は20世紀初頭にアメリカに生まれ、世界大戦、死別悲嘆、自殺、終末期医療といった現代的状況を背景に、生命倫理学と呼応するかたちで20世紀中旬から注目されるようになった。死生学は、死と生に関わる諸学問分野の歴史的成果を結集し、現代社会に内在する現実的課題に取り組むことであり、社会的役割において意義をもつことは明らかである。死生学が必要とされ、成果を上げてきた主な現場には、終末期医療(病名告知、尊厳死、脳死、グリーフケア等)、教育現場(いのちの授業、HIV教育等)、自殺予防といったものがある。

### (2) 死の隠蔽、死のタブー視、死生観の空洞化

死は哲学史上でも主題的に扱われてきたテーマである。「いかにして死に処するか」という問いに対する普遍的結論は、死後生の在り方の不可知性(経験不可能性)によって、事実的にも倫理的にも導出しえないという特異性をもつ。死の理解や死に対する態度は、文化的背景によって形成された死生観に依存するものであり、死生観に応じて、死は絶望にも希望にもなりうる。ヘレニズム期に代表されるように、哲学は死の恐怖の解消を意図するものでもあるが、*Sein und Zeit*(1927)においてハイデガーが、死の不安を隠蔽する人間の根源的な存在性格としての頹落(Verfallen)に言及しているように、哲学は、人間の日常における死の隠蔽という特徴を暴露するものでもある。

死の隠蔽を人間の根源的存在性格とする哲学的考察がある一方で、社会学的分析において、アリエスは現代に特殊な文化的状況としての「死のタブー視」についての考察がある。ゴラーやエリアスは異なる視点からこれを補完している。

我々の日常的な感覚として、死を現実に見る機会が極端に少ないという事実、死について語ることが人々の間で忌避されているという事実は、否定しがたい。申請者は、哲学および社会学における死の隠蔽の考察を批判的に精査しつつ、統合的に分析することで、死の隠蔽の実状をとらえる研究を続けてきた。そこから明らかになったことは、現代社会が死生観の空洞化を促進させる構造をもつことであり、隠蔽される死の大半を引き受けることとなる医療福祉現場においてさえ、医療従事者、患者、家族間の関係性のなかで、さらなる死の隠蔽傾向が見いだせるということである。この二重の隠蔽は、死に苦悩する人間の内的葛藤を放置し、社会全体の死生観の空洞化をもたらす要因のひとつとなる。

### (3) 臨床哲学の必要性

終末期患者の心理分析については、精神科医キューブラー＝ロスの *On Death and Dying*(1969)を契機として盛んに研究されている。また、脳死、尊厳死などの生命倫理上の問題や、アメリカを中心とする人権問題によって、患者の意志を尊重するという態度は現在では定着しつつある。哲学はこれらの活動に寄与してきたが、こうした原則や理論についての考察とは別に、近年、個別の臨床ケースに対する哲学的介入の必要性を主張する立場が現れている。国内においては臨床倫理、臨床哲学といった名で清水哲郎や鷺田清一が既に研究と実践において成果を示している。アメリカやイギリスなどでは、患者の苦悩に対する哲学的、宗教的ケアの専門家が病院内に常駐するという段階にまで達している。当研究も、個別の臨床における哲学的アプローチの必要性と可能性について、死の隠蔽構造を前提するという独自の視点で考察するものである。

## 2. 研究の目的

本研究の骨子は、生と死の哲学とその実践にある。この根源的かつ広範な問いに対して、現実的状况に内在する課題を学際的に精査しつつ、実践を目指す死生学的探求を展開する。現実内に内在する具体的課題として本研究が注目するのは、「死の隠蔽」ないし「死のタブー視」と呼ばれる事態である。死という出来事に対する具体的な接触および死に対する意識への忌避は、死生観の空洞化という社会的状況を招くと同時に、現代の死を請け負うかたちとなる医療福祉現場において、死に苦悩する人々を取り巻く関係性の問題を顕在化させた。本研究は医療福祉現場におけるコミュニケーションのあり方を哲学的に模索することで、終末期医療と死生観の空洞化という現実課題に実践的に取り組むものである。

## 3. 研究の方法

(1) 死の隠蔽、死生観の空洞化がもたらす具体的現象として、終末期医療における医療従事者、患者、家族が抱える苦悩と、相互のコミュニケーション不良の問題を、事例検討を用いて示す。その際、日本、北米、欧州における現状比較と、そこに内在する文化的背景の相違について、権利意識、宗教性、他者配慮等の視点から分析することで、問題の相対化を図る。

(2) 上記の研究を踏まえて、適切なコミュニケーションによる相互ケアに成功した事例について対比的に検討することで、死の隠蔽、死生観の空洞化の構造と、それが社会にもたらす無自覚の弊害の一端を明らかにする。国内における事例検討に並行して、アメリカやヨーロッパにおけるスピリチュアルケアの最新の報告についても分析し、国内での実現可能性について検討する。

(3) 上記の研究を踏まえて、既に行ってきた

た哲学的研究を基に、終末期医療における実存的コミュニケーションの具体策を提示する。具体的には、在宅ケアによる死の日常化と、家族間の語りの促進という積極的介入方法について言及する。またこの方法が社会全体にもたらすデス・エデュケーション効果についても言及する。

## 4. 研究成果

(1) 終末期医療の臨床では、死という事実に対して、死にゆく者やその家族、医療従事者が適切な態度を見出せずに苦悩していることが問題とされているが、本研究では、この問題が医療現場での突発的、局所的問題ではなく、現代社会の死の隠蔽構造が必然的に導き出した本質的な苦悩の顕在化であるということ、哲学、社会学、精神病理学等の学際研究によって明らかにした。その際必要となるのが、各学問における専門化された「死」の概念を、実践につなげるための現実の死へと変換する作業である。そのため、本研究は、新興の学問である死生学を歴史的、方法論的に整理し、死生学という学問の基礎付けを行うことで、それを達成した。死生学の定義づけは、日本国内はもとより海外においても詳細かつ適切に成されてはならず、この試みは本研究とともに、死生学研究全体の促進を導くためのものである。

(2) 臨床において、病理としてではなく、人間に本質的な苦悩として死を扱うために必要とされる、死生観の存在意義を、比較文化的な事例研究を踏まえながら明らかにした。苦痛苦悩の解消を目的として患部を治療するという医療の原則では、死に対する態度を扱うことはできない。死に対する苦悩を解消に導くためには、たとえ医療現場であっても、治療の範囲を越えて、確たる死生観を形成させるという方法をとることが求められる。しかし死生観には、文化、伝統ごとの死

生観の多様性からくる死への態度と苦悩の意味づけの相違があり、さらに、文明社会全体の傾向としての死生観の空洞化による死の意味づけの不可能性ないし隠蔽が現代ではより重要な問題となる。

(3) 上述の現状を踏まえて、死の臨床における死生観の相互形成を導く哲学的実践として、「実存的コミュニケーション」の可能性を提示した。死生観形成においては、苦悩の解消という一方向的なケアではなく、本質的な苦悩を各々が固有なかたちで受容し、意味づけるという態度をとらねばならない。それは「医療従事者 - 患者」や、「死にゆく者 - 看取る者」という事実を基礎におきつつも、「等しく死に行く人間同士」として、それぞれの本来的な生を導出するためのコミュニケーションである。ただし現状では、臨床現場における死の隠蔽の構造がそれを阻んでいる。それゆえ、家族や共同体のなかで死を感じあい、生を示しあう在宅ケアや世代間交流等の環境構築や、積極的介入によって死の語りを引き出すチームケアの担い手が必要となる。

以上の考察は主に『死生学 - 死の隠蔽から自己確信へ - 』において体系的に論じた。この著作によって、終末期患者や医療従事者の苦悩に対する哲学的応答を行うことができた。実践の方途として、今後は医療現場のほかにも自殺予防等、さらなる展開を見込んでいる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

岩崎大、「日本的「死の隠蔽」の構造分析 - ぼっくり願望の現在」、東洋学研究、査読有、第51号、2014年3月25日、235-250頁。

岩崎大、「死生観と自然観をつなぐ環境デザイン - ホスピスにおける風景の意義

」、「エコ・フィロソフィ」研究、査読無、第9号、2014年3月25日、125-137頁。  
<http://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/11714.pdf>

〔学会発表〕(計 2 件)

岩崎大、「自然観と死生観をつなぐ - 終末期患者の視線から - 」、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ・茨城大学地球変動適応科学研究機関共催国際セミナー「自然といのちの尊さについて考える - 」、2014年2月22日、東洋大学(東京都文京区)

〔図書〕(計 2 件)

竹村牧男、中川光弘監修、岩崎大、関陽子、増田敬祐編著、ノンブル社、『自然といのちの尊さについて考える』、2015年、492頁(251-276頁)。

岩崎大、春風社、『死生学 - 死の隠蔽から自己確信へ - 』、2015年、420頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩崎 大 (IWASAKI Dai)

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ 研究助手

研究者番号：80706565